

代 打 者

— 台湾神父 涂敏正 —

陳 梅 卿

一九三六年十二月一九日、台湾出身の涂敏正が、神父になつた。これは一八五九年にスペイン・ドミニコ会が台湾へ二度目の布教に来て以来、初めての台湾出身の神父誕生であつた。

涂敏正の戸籍上の名は明正であり、現在の台湾省彰化県埔心郷羅厝村の生まれである。涂は明治三九（一九〇六）年八月一三日に生まれ、一九七六年に死去した人物である。

一、はじめに

博士論文「マツカイを中心に——清代台湾におけるキリスト教の受容と展開——」を書き上げてから、早くも十年以上の年月が経過した。その後、台湾における長老教会についていくつか論文は発表したが、いまだに台湾のカトリック教会についての論文を一つも書いておらず、自分の不勉強

強さを痛感しながら、時を過ぎてしまった気がしている。なぜ、私が涂敏正のことについて、調べることになつたのか。それは、本当に偶然としかいいようがない。

一九九六年のある日、正確な時間は覚えていないが、私と教え子の楊君は、調査のために彰化へ赴いた。県道一四八号線を車で走っていたとき、楊君は道端の小道を指差して、「先生、ここから羅厝教会へ行けます。」と言つた。それを聞いて私は即座に、「行ってみよう。」と彼を誘つたのだつた。結局、車でその小道へと入り込んだ。その道端の右側にある天主教墓地を通り過ぎた所に、羅厝教会はあつた。羅厝教会と言うと、台湾中部におけるカトリック教会の発祥の地であり、台湾神父第一人者の涂敏正の出生地だと記憶していた。教会に着いた後、案内してくれた黄清富神父に、涂神父のことについて尋ねてみた。すると、黄神父から意外な答えが返ってきた。

「涂神父は、私の実の祖父の兄弟ですが、父親（故黄崇意氏）は自分の父親の姉（故涂昭女史）の所へ養子に出されたので、養祖父の側に立つと舅公（大伯父）ですが、実の祖父母側からいうと、叔公（大叔父）です。」

それから黄神父と、さきほど通りかかった天主教墓地にある、涂神父のお墓にお参りした後、羅厝教会の近くにある涂家の宗祠——徳心堂へと案内をしてくれたのである。

また、思いやりある黄神父は涂神父の日記のコピーをプレゼントしてくれたのである。その日記は簡条書きで、一九二四年から一九五四年までのものであった。またそれは、漢文に日本語を織り交ぜて書かれていた。

台南に戻った後、日記を一気に読み終えて、私の涂神父に対する好奇心はますます強まった。一体、涂神父の生涯とはどういうものだったのか、なぜ神父となる道を選んだのか、また台湾出身の神父が、日本植民地時代にスペイン・ドミニコ会（The Dominican Mission）のカトリック教会において、どのような役割を果たしていたのか。以上のような点について、私は非常に関心を持ったのであった。そして、一九九六年五月一九日、私が教鞭をとっている成功大学歴史学科の創立三十週年記念シンポジウムが開催され、その機会を借りて、涂神父に関する論文をまとめ、発表した次第である。

二、羅厝教会と涂家

彰化県は台湾中部に位置し、一市、二十五の郷、鎮がある。埔心郷はその中の一郷である。

羅厝という部落は現在の埔心郷にあたる。現在は羅厝と芎蕉の二つの村となっている。羅厝は、埔心郷の中心地区から約二・五キロの場所に位置している。羅厝という地名は、大陸から移住してきた広東省饒平県羅姓の民衆が、台湾中部から開墾を始め、その地区を開墾した一族の姓を地名としたことによる。^①しかし現在の羅厝村に、羅姓の住民は二世帯しか残っていない。^②

現在羅厝は、米、野菜、果物の一大生産地である。現在、黄、劉、邱姓を名乗る住民が多い。芎蕉村も客家人により開墾された土地であり、もともと黄姓の住民が多かった。^③

その頃ほとんどの農村がそうであったように、羅厝村も民間信仰の盛んな村であり、「霖鳳堂」「三興宮」という古くから信仰されてきた廟があった。^④一八七五年当時、羅厝在住であった涂心は、商売のため、頻繁に台湾中部と南部を往来していた。ある時、高雄で聞いたカトリック神父の説教に感銘を受け、羅厝に戻り、三人の親戚——崙頭の黄過枝（妻の父）、新厝の劉鎮、後壁厝の劉江——と相談のうえ、高雄から神父を招聘した。^⑤

代 打 者 (陳)

彼らの招きに応じ、ドミニコ会士ヴィセンテ・ゴマル神父 (Fr. Vincente Gomar) が、伝道師林水蓮と共に後壁厝へ赴き、一軒の民家 (現在の信者、張魚旧宅) を借受け、布教を開始した。これは一八五九年、ドミニコ会が台湾での再布教開始以来、台湾中部に始めて拠点を置いた形となった。

その後セレドニオ・アラン神父 (Fr. Celedonio Arranz) も、そこへ赴任し、共に布教活動を展開した。それから二年後、ゴマル神父は当時の現金百十円をもって、埔心郷中羅村羅厝路四九号の土地を買い、そこに教会を建立した。これこそ羅厝村の教会であり、台湾中部における初めてのカトリック教会の設立であった。

羅厝村の人々の信仰もこの教会の設立を機に大きな変化を見せた。伝統的な漢人——福建系住民、廣東系住民の別を問わず、従来の民間信仰の影響が薄れ、カトリックを信仰する人が急増した。

一九九三年に出版された《埔心郷志》頁一五一—一五二によると、開墾当初、埔心郷には、涂姓を名のる家が二軒あった。先述したように羅厝の涂心は、一八三八年に開墾のため移住してきた新館村の涂長徳の末裔であった。涂長徳は廣東省饒平県の出身であるので、客家人であると言えるが、台湾への移住以後、福建系の人々と居を共にし、その子孫は客家語を話せなくなってしまった。現在の用語で

言えば、福佬化 (福建化) されて福佬客 (福建化された客家人) になってしまったのであった。

黄神父が案内してくれた涂氏の宗祠——徳心堂の壁に書かれた系譜によれば、涂氏一族が台湾に移住して来た、第一代目の祖先は、涂徳であるとされていた。しかし、涂徳と前述した涂長徳が同一人物であるかどうかを、涂の末裔も確認できなかった。《新館村涂氏族譜》に、「涂心」という名前がなかったため、涂徳と涂長徳の確認の証拠がなかったということであった。

ただし、黄清富等編《羅厝耶穌聖名堂開教一二五週年紀念專刊》^⑥によると涂家が天主教に改宗したため、家系譜から除名され、系譜の中にその一族の名前を見ることはできない。上述の説はかなり信用できるものであるといえる。

二代目の涂心 (一八三三—一九一〇) は漢方医で、眼科の名医と言われた人である。医業のかたわら商売も営んでいた。彼の末裔の話によると、かなりの土地を所有し、裕福な暮らしをしていたということである。三代目の涂宰 (一八六六—一九一一) も家業を継いで漢方医となったものの、若くしてこの世を去った。親子ともどもその時代にあつて、かなりの教養の持ち主であつたと伝えられている。その四代目として生を受けたのが涂明正で、どのような理由で敏正と改名したのかは、わかっていない。

涂心が天主教に入信を決意した直接の動機については不明であるが、一八七五年、カトリックの神父を羅厝に迎え入れた中心人物であった。涂心の入信により、その家族も天主教の信者となり、そして彼等の影響を受けた羅厝村の人々の多くが、カトリックの信者となる道を選んだのであった。

三、涂敏正神父の生涯

涂敏正神父の生涯は以下のようである。（表一参照）。

前述したように、涂敏正は涂宰の三子であり、長兄は涂通、次兄は涂明智、長姉は涂昭、末弟は涂明珠である。

涂敏正は、一九〇六年にこの世に生を受けた。一九一一年にその父涂宰が死去し、翌一九一二年、母黄氏治も父の後を追うようにしてこの世を去った。その後涂敏正は祖母劉快の手により育てられた。しかし、祖父涂心がたくさん土地を所有する富裕階層であったため、両親を亡くしたとは言え、その生活はかなり裕福なものであったと言われている。

涂敏正が就学年齢に達する頃、羅厝にはまだ公学校が創立されていなかったため、漢文の塾で教育を受けることになった。しかし、一九一六年、永靖公学校舊館分校が創立

されたため、学びの場所をここに移したと伝えられている。しかし、永靖公学校と舊館分校の過去の学籍に涂敏正の名前をみつけることはできなかった。涂神父の日記には多くの日本語の単語が使われていたし、西螺教会の信徒によると、生前、涂神父は日本語が話せたということであったので、涂神父は日本の公学校で学んだのであろうと推測はできるが、卒業したかどうかについては確認することはできなかったし、その学び舎を確定することもできなかったのであった。

涂神父が学校を離れたしばらくの間、羅厝教会で雑役を手伝っていたと伝えられている。その後、マニユエル・パート神父 (Fr. Manuel Prat) の勧めにより、一九二三年に台南のカトリック伝道師訓練班に学んだ。翌年マニユエル・パート神父が、厦門に転職後主教となって自ら創立した白水宮小神学校に、洗礼を与えた涂神父を入学させるために呼び寄せた。

一九二八年、涂神父は白水宮小神学校を卒業後、引き続きその予科、哲学班に入学し、一九三一年それを卒業した。同年、香港の鴨巴甸華南神学校 (Religious Seminary de Aberdeen Hong Kong) に再入学した。一九三三年、涂神父は転地療養のため、港尾に赴いたが、一九三四年その体

表一 涂敏正神父の生涯

一九〇六年	八月三〇日	羅厝で出生。
一九一一年	八月三一日	羅厝教会でマニユエル・パート主教により洗礼を受ける。
一九二二年		父(涂宰)死去。
一九二六年		母(涂黄治)死去。
一九二八年		台南天主教伝道師訓練班に入學。
一九三一年		厦門白水宮小神学校に進學。
一九三三年		予科哲学班卒業、予科哲学班に進學。
一九三四年		予科哲学班卒業、香港アバディーンの華南大神学校(Religious Seminary de Aberdeen)入學。
一九三五年	六月	港尾において静養。
一九三六年		台湾に戻り、静養。
		鼓浪嶼で受験。
		香港華南大神学校卒業。
		五品典礼。
	四月一日	神父になる (Ordination of Presbyters)。
一九三七年	二月二九日	台湾に帰郷。
	二月二二日	羅厝に戻り、初めてのミサを司る。
	一月一日	台北へ赴く。
	一月三〇日	石碇で神職に就く。
	七月七日	日中戦争勃発。
一九三八年	三月九日	命令により、総動員訓練に参加。
	三月四日	トマス主教 (Fr. Tomasde la Hoz) の南下にともない、仕事を引き継ぐ。その後日本人信徒と交友を深める。
		新竹湖口に於いて伝道。
一九四〇年	四月二日	羅東で講演。
	一月四日	樹仔脚教会に依頼され、フランシスコ・ヒネル神父 (Fr. Francisco Giner) と林漢の衝突についての調査を実施。
	九月二〇日	石碇を離れ、樹仔脚教会へ転任。
一九四一年	四月一六日	聖体を迎える。
	五月一〇日	李天一と共に、日本警察に面倒を掛けられる。
	五月六日	新教区の主教として里脇淺次郎が赴任の一報に触れる。
	六月二九日	里脇が赴任。トマス主教と、コンスタチノ・モンテロ神父 (Fr. Constatino Montero) の新主教を歓迎しない態度に怒りを表明。
	七月二日	里脇教区長を迎え入れる。

一九四二年	六月一日	古川神父が台湾のカトリック教会を支え、台北教会に居を構える。
一九四二年	六月四日	コンスタチノ・モンテロ神父は涂神父が蓬萊町教会（台北華山堂）に来ることをおそらく思わず、接待することなく、石碇へと行ってしまった。
一九四四年	一月一日	コンスタチノ・モンテロ神父の事件について調査。
一九四四年	一月二日	コンスタチノ・モンテロ神父は台中に配任。
一九四四年	一月二日	トマス主教は里脇主教に涂神父も事件に関係していることを告げる。
一九四五年	一月一日	李天一、李惟添が神父になる。
一九四五年	二月一日	里脇主教が徴兵され、兵長として入隊。
一九四七年	九月一日	日本軍降服。五塊厝教会も兼任。
一九四八年	四月二日	日本軍が萬金教会から撤退し、損失を補償された。
一九四八年	四月二日	教区長の職を任じられる。
一九四九年	五月一日	ヨゼ・アレギ (Fr. Jose Arregui) が教区長となり、涂神父は教区長の職を離れる。
一九五三年	五月八日	五塊厝に聖ルイス修道院創立。
一九五七年	八月二六日	聖ルイス修道院完工。
一九五七年	九月	荊桐郷饒平村教会へ転任。
一九七七年	二月二八日	林内教会を設立。
一九七七年	二月四日	西螺教会において、退職。
一九八二年	二月四日	蒙席 (Monsignor) になる。
一九八二年	二月四日	死去。
一九八二年	二月四日	里脇教区長の着任式典開催。
一九八二年	二月四日	里脇教区長と共に、台南へ赴く。
一九八二年	二月四日	里脇教区長と共に、台中へ赴く。
一九八二年	二月四日	高雄へ赴くが、トマス主教は、警察の禁止命令により台南で足止めに遭う。
一九八二年	二月四日	要塞地である高雄に、ドミニコ会神父の居留が認められず。
一九八二年	二月四日	萬金へ配任。
一九八二年	二月四日	外国人神父、修道女に高雄からの撤退命令が下される。
一九八二年	二月四日	日本がアメリカに宣戦布告。
一九八二年	二月四日	高雄の山下教会が、日本軍に占拠され、中、北部ではドミニコ会神父が日本軍に軟禁される。
一九八二年	二月四日	日本人により、ドミニコ会神父の台湾撤退命令が下されるが、相談の結果白紙に戻る。
一九八二年	二月四日	古川神父が台湾のカトリック教会を支え、台北教会に居を構える。
一九八二年	二月四日	コンスタチノ・モンテロ神父は涂神父が蓬萊町教会（台北華山堂）に来ることをおそらく思わず、接待することなく、石碇へと行ってしまった。
一九八二年	二月四日	コンスタチノ・モンテロ神父の事件について調査。
一九八二年	二月四日	コンスタチノ・モンテロ神父は台中に配任。
一九八二年	二月四日	トマス主教は里脇主教に涂神父も事件に関係していることを告げる。
一九八二年	二月四日	李天一、李惟添が神父になる。
一九八二年	二月四日	里脇主教が徴兵され、兵長として入隊。
一九八二年	二月四日	日本軍降服。五塊厝教会も兼任。
一九八二年	二月四日	日本軍が萬金教会から撤退し、損失を補償された。
一九八二年	二月四日	教区長の職を任じられる。
一九八二年	二月四日	ヨゼ・アレギ (Fr. Jose Arregui) が教区長となり、涂神父は教区長の職を離れる。
一九八二年	二月四日	五塊厝に聖ルイス修道院創立。
一九八二年	二月四日	聖ルイス修道院完工。
一九八二年	二月四日	荊桐郷饒平村教会へ転任。
一九八二年	二月四日	林内教会を設立。
一九八二年	二月四日	西螺教会において、退職。
一九八二年	二月四日	蒙席 (Monsignor) になる。
一九八二年	二月四日	死去。

代 打 者 (陳)

調は思わしくなく、七月台湾に戻り、静養することとなった。翌年4月には再度厦門に赴き、修学した。一九三六年一月一九日、涂敏正は台湾人で始めて、神父となったのであった。

涂神父はカトリックを信仰する家庭に生まれ、出生の翌日には洗礼を受け、両親の意図によりカトリック信者となった。言うなれば、彼の信仰は両親により導かれたものであり、自分の意志によるものではなかった。

前述のように、涂神父は羅厝教会で雑役の仕事を手伝っていた際に、神父の推薦により台南で伝道師訓練班に入学した。その後厦門と香港で合計十年間、小神学校と大神学校において神学教育を受け、長い道のりの末、台湾人にして第一号の神父となり得たのであった。

神学教育を受けることとなった動機については、涂神父の日記にも書かれていなかったし、これまでの涂神父親族からの聞き取り調査でもその動機について知ることはできなかった。今となつては、それを知ることが不可能かもしれない。しかし、高雄の山下教会（玫瑰堂）の信者、楊氏の話によると、当時の台湾のカトリック信者にとって、自分の親族が神学校に進み、ましてや神父になるということは、この上ない光栄と見做されていたと、カトリック信者の両親の下に生まれ、その信仰を受け継いだ涂神父

が、神学教育を受け神父になる道を選んだことは、ごく自然なことなのかもしれない。

当時の一般カトリック信者家庭に生まれた男子は、小学校或いは公学校を卒業後、小修道院に入り、修業の準備をした。涂敏正もその習慣に従い、小修道院に入ったのであった。例えば《羅厝耶穌聖名堂開教一二五週年紀念專刊》のなかの記録によると、羅厝教会信者の邱天祚（一九二五年生）と黃義弟（一九一四年生）が田中傳道学校に入学。また、黃雅各（一九〇四年生）と黃崇意（一九二三年生）は涂神父と同じように台南の傳道師訓練班に入学している^⑦。しかし、その厳しい修行生活に耐え切れなかった多数の男子は途中で退学してしまい、神父になることはできなかった。涂敏正は揺るぎない信仰と強い意志により、厳しい修行に耐え数々の試験を乗り越えて十年にも及ぶ神学教育を受け、台湾人第一号の神父となった。

十年間に及ぶ神学生生活の中で涂神父は病気を患い、台湾に戻って静養をしたが、その病気が何であったのか彼の日記にも詳しい記述はなく、親族もそのことについて承知していないようであった。ゆえに、彼を蝕んだ病気が何であったのかについては不明である。

神父となった後、涂敏正は一九三七年から一九七六年に至るまで、台湾各地の教会、神学校において以下のように

布教活動を展開した。

〔戦前〕

・ 石碇教会 (一九三七年～一九四〇年)

・ 樹仔脚教会 (一九四〇年～一九四一年)

・ 萬金教会 (一九四一年～一九四五年)

戦争末期、スペイン神父が要塞地であった台湾から追放された後、里脇教区長と共に、萬金教会と高雄山下教会の教務を担ったと言われている。

〔戦後〕

・ 萬金教会 (一九四七年～一九四八年) — 台湾教区長を務める。

・ 神学院院長 (一九四八年～一九四九年)

・ 饒平教会 (一九四九年～一九五三年)

・ 林内教会 (一九五三年～一九五七年)

・ 西螺教会 (一九五七年～一九七六年)

・ 退職 (一九七六年)

・ 死去 (一九八二年)

では、涂敏正神父の人柄について筆を進めたいと思う。

林碧蓮女史は「同僚の目から見ると、非常に面倒見が良く、いつでも相手の立場に立って、ものを考える人であった」と述べた。一九一二年生まれの林女史は姑婆であり、かつて萬金教会と五塊厝教会と一緒に布教活動に従事した

同志であった。萬金教会にいた頃、空襲が頻繁にあったうえ、教堂の建物が日本軍により占領され、露天でのミサが行えなかった。また、自分達の生活用品さえも置く場所がなく、信者の家に預けるしかなかった。特に食料品が著しく不足し、野原に生えている山菜を探して飢えをしのいでいた。このような状況にあっても、神父がその生活苦について愚痴をこぼしたことは一度もなかったと語った。

また現在、林内の教会で布教活動に従事している臧詳明神父(一九二三年生)は、この教会で涂神父と十ヶ月程、共に仕事をされたということで、臧神父は涂神父について、次のように述べられた。

「神父は心の優しい方で、仕事もよくできた。」

「スペイン人のドミニコ会神父は、涂神父のことをあまりよくは思っていなかった。涂神父が、日本人の里脇主教と協力のうえ、李天一と李惟添(後、神父となった台湾人の二人を日本へと送ったこと)についてもかなりの批判があったようだ。これはスペイン人と台湾人の価値観の違いから発生したことと思われる・・・」と臧神父は淡々と述べた。それでは次に、信者の目から見た涂神父に対する印象について述べたいと思う。

高雄山下教会(玫瑰堂)の老信者、黄占女史は涂神父が一九四五年から一九四六年まで、その教会における布教活

代 打 者 (陳)

動の様子について次のように述べた。

「涂神父は見た目はとても厳しい方でしたが、礼儀正しく、必ず挨拶をしてくださり、見た目とは違いとても親切な方であるという印象を受けた。」

また、西螺教会の信徒で、晩年の涂神父とも交流のあった信者(名前不明)は、涂神父についての思い出をこのように語った。

「神父様は普通の年配の方比べると少し太めで、タバコを嗜まれ、いつも私を呼ぶときは「…さん」とさん付けで呼んでくれた。」

更に、涂神父の教え子にあたる潘瓊輝神父の涂神父に対する印象は、かなり厳しい先生というものであったらしい。

「私が小修院の学生だった頃、授業をさぼって寮にいたところ、涂神父が鞭をもって叱りに来たのが見えたので、ベッドから飛び起き、教室へと駆け出した。」潘瓊輝神父は当時の思い出を懐かしげに話してくれた。

最後に家族は、涂神父をどのように受け止めていたかについて触れてみたいと思う。

黄清富神父は「私の伯父とその世代の子供達は、一定の年齢に達すると、神父と生活を共にした。それは神父の下で教育を受け、一般常識を身につけさせることが目的であった。」と語った。

以上の話から考察すると、家族の目から見た涂神父は、厳しいけれども愛を以て、子供を正しく教育することのできる立派な人であると認識していたと推測できる。また視点を変えて見てみると、涂神父は一族の成功者であり、誇りの象徴であるということができ、その神父に自らの子供を託すことは、自然なことであったということができる。

また、日記のコピーを調べていくと、涂神父はかなりの漢文の教養もあり、事あるごとに漢詩を作って楽しんだようだ。涂神父の公学校の学籍は確認できなかったけれども、日本語の読み書きができ話せたということは確実である。英語、スペイン語、ラテン語の能力については確認できなかった。日常生活には閩南語を使い、晩年は北京語も聞き取れたと伝えられている。

四、代 打 者

涂神父の生涯のなかにもっとも注目されたことは二つあった。一つは一九四一年、日本の里脇淺次郎(一九〇四―一九九六)教区長が台湾に到着した以後、涂神父は里脇淺次郎と合作したことであった、二つ目は一九四六年四月、里脇淺次郎が敗戦によって日本へ送還された後、涂神父は教区長の職を代理したことであった。ただし、一九四八年五月、ス

ペイン会籍のドミニコ会ヨゼアレギ神父が教区長の職にもどり、涂神父は再度普通の神父になったと伝えられている。なぜ里脇淺次郎が台湾へ赴き、教区長の職についたのか。これは日本当局の宗教政策によるものと思われる。

まず、一八九五年日本が台湾へきて統治した際、最初旧慣温存の政策をとって台湾元来の民間信仰を尊重し、原住民の原始宗教にも干渉しなかった。更に当時イギリス長老教会、カナダ長老教会とドミニコ会の台湾におけるキリスト教伝教活動も認めた。しかし、一九三〇年に入ると、日本の台湾統治がおちついてきたし、更に日本国内の帝国主義が横行した後、中国への侵略が深刻化した。そのために、台湾島内における諸政策が更に一層厳しくなったといえる。特に台湾島内の宗教政策は一変し、一九三六年から漢民族の民間信仰についていわゆる「寺廟整理運動」が行なわれて、多数の廟の建物が接收されて神像が強制的に棄てられた。キリスト教会の両長老教会もいろいろな迫害を受け、一九四〇年、カナダ長老教会が妥協して日本人と合作した。一九四三年にはイギリス長老教会の神学校が閉鎖されたし、長栄中学と長栄女中の校長が日本人になったし、イギリス人の牧師、教師と医師が強制退去させられた。台湾における聖教会諸教会も強制的に閉鎖された。

その一連の排教運動のなかに、スペイン当局は全体主義

を行なおうとする日本との関係に緊張感を持ちつつあった。そこで、スペイン籍ドミニコ会士トマス教区長の職が解除された。そのかわりに長崎出身の里脇淺次郎が赴任した。そして、里脇淺次郎が、一九四一年五月二二日に台湾に到着したのであった。

そして、その後の六月二九日、里脇神父が教区長の職に付いた。それで、涂神父は七月一〇日から一二日まで里脇神父につきそって台中、台南と高雄をまわった。そして、七月一五日涂神父が高雄の近くにあった萬金に転勤されたのであった。

なぜ、涂敏正神父は里脇神父と合作したのか。里脇教区長の立場によれば以下の理由があった。第一、涂敏正は日本語が話せたし日本文も読めるので、互いの意見の交流はスペイン人神父より便利だと思われた。第二、一八五九年から台湾に布教してきたスペイン・ドミニコ会士は日本政府の政策の圧迫によつて教区の管理権を放棄せざるをえなかった。更に一九四一年六月二九日の涂敏正の日記の記載によれば、トマス主教とコンスタチノ・モンテロ神父が新主教を歓迎しないという記事があった。ドミニコ会神父がすべての管理を放棄し、そのために日本人と合作したと言える。ドミニコ会の一部の人たちが里脇神父に対して非好意的な態度をとっていたと思われる。涂神父はこのドミニ

コ会の態度に対して極めて怒っており、このことに關して
 涂神父とドミニコ会神父の間に里脇神父に対する態度の不
 一致がよみとれる。涂神父は里脇神父に対してスペイン人
 神父とくらべればやや歡迎的な態度をとったと言える。そ
 れで、涂神父は合作的な立場に立つたのかもしれない。第
 三、涂神父は里脇神父より二歳年下なので、里脇神父から
 みれば、よい部下になると言える。そのために里脇神父が
 涂神父を選んで合作したのだと思われる。

ただし、涂神父はどのような立場に立っていたのか。ま
 ず生長の時、一九〇六年生れの涂神父は日本が台湾を占領
 した十年後に生れた。涂神父は日本人として生れたと言え
 る。涂神父の公学校の学歴は不明だが、涂神父は日本語が
 話せ、日本文はある程度読めることは日記のコピーから証
 明された。その際、祖国の中華文化、そして植民化された
 体験などは、当時の涂神父にとっては気がつかなかった問
 題と言える。かえって日本人の里脇教区長に対して親近感
 をもつていたのかもしれない。里脇教区長の渡台の裏にあつ
 た当局の強制政策は気にしなかった。涂神父のカトリック
 信者家族背景、カトリック化された家庭に生れたこと、そ
 して信者から自ら選んで神父になったこと、涂神父の生活
 と生涯のなかで、信仰が生活のなかの重要な点であり、教
 会の組織のなかに抵抗せずに合作し得たのも信者の協力が

あつたからであろう。それゆえ涂神父は組織の命令にした
 がって里脇教区長に協力したものと思える。

しかしながら、一九四五年八月一日、日本政府が降服
 をした。そのことによつて日本は台湾の統治権を放棄した
 のであつた。日本人は台湾から退去をしなければならなかつ
 た。そこで里脇教区長も台湾教区長の職を失ない、国外へ
 退去させられた。そのために、涂神父は区長の代理をした。
 涂神父の代理は一九四三年まで行なわれた。その後、情勢
 が安定してから、スペイン人の神父が再度管理権を握つた。
 戦後、涂神父が教区長を代理したことはまさに代打者だつ
 たと言えるだろう。

神父が代打した理由はドミニコ会の文書のなかからはみ
 つけられず、涂神父の日記のなかにも述べられていない。
 ただ、涂神父はカトリック教会の組織のなかでは最年長の
 台湾人神父であり、特に戦後の混乱期にスペイン人神父に
 は状況に即した管理が出来なかつた。そのために、涂神父
 が混乱の状態のなかでやむを得ず、胸を張つて出てきたも
 のと思われる。しかしながら、筆者が一番知りたい事は涂
 神父の心境は一体何であつたのかという事である。

五、終わりに

一九〇六年生れの涂敏正は祖父の改信によってカトリック信者になった。かつて羅厝教会に勤めたマニエル・パート神父の紹介で遠い厦門の小神学校に入学した。そして十年勉強した後、はじめての台湾出身の神父になった。神父になった心境は日記の記載よれば、以下のようである。「悲しみを思うのか、喜びを思うのか。」かなり矛盾した心境だと言える。

涂神父は神父になるために、十年以上香港、厦門で神学の教育を受けることができた。そうでなかったら、幼年期に両親を亡くした神父はよい教育をうけずに生長したかもしれない。しかし、神父になったので、修行のために結婚もできず、沢山の制限があったのは間違いない。特に当時漢人社会には「不孝有三、無後為大」の習慣があったから、神父になったことに極めて矛盾した気持ちをもっていたにちがいない。

一八五九年以来台湾におけるカトリック布教はずっとドミニコ会士が中心であった。ドミニコ会は固い布教の方針を取って、現地の文化、習慣と一切妥協せず、布教をおこなった。そのため、涂神父が一九三六年神父になるまで台湾人出身の神父は一人もいなかった。また、一九四一年太

平洋争がはげしくなってから、日本当局に強制されて、ドミニコ会神父もやむをえず修道会の管理権を日本人里脇浅次郎に委託した。

長崎出身の里脇浅次郎は強くて硬いドミニコ会の教区で、日本語と日本語が理解できる涂神父を選んで合作した。正式の文書にはみられないが、ドミニコ会士の不満は沢山あったと言える。里脇ら日本人との間にはさまれた台湾人神父涂敏正は大変だったと想像ができる。但し、涂神父はやや里脇神父に同情的な立場にたつたとみられる。そして、ドミニコ会士の涂神父に対する態度も想像にかたくない。

戦後、里脇教区長が一九四六年四月五日に日本へ送還された。その後から、涂神父は教区長の代理をした。一九四六年五月六日涂神父の日記によれば、教区の全財産わずか五百八十五元だけという、きびしい経済のなかで涂神父は教区のために力を尽くした。一九四八年四月二八日、涂神父は代理の職をやめた。また管理権がスペイン神父の手に握ぎられた。外からみれば、涂神父はあくまで代打者として取りあつかわれた。

涂神父はなぜ代打者の役割をやらなければならなかったのか、これは興味深い問題である。まず、台湾人神父の数が少ない。一九四五年まで、台湾にはただ李天一、李惟添と涂神父三人の神父がいただけである。これに対してス

代 打 者 (陳)

ペイン神父が圧倒に多数だったから、多数の人数ではやりづらいことをいつも少数者が代打者として代理したのはよくあったことだろう。第二には、カトリック組織のなかでは個人の選択権が少ないから、いつも組織の言う通り動くので、涂神父もそのために、代打をしたと考えられる。

最後に、涂敏正という人物を台湾カトリック教史のなかにどのように位置づけるのか。固いドミニコ会の組織のなかに涂神父は教会に対して影響力が弱い。ただ、ドミニコ会士ができないことがあった際、涂敏正はいつも第一線に立って協力したと言える。ドミニコ会の布教と日本人の植民地政策について涂神父はどのように思ったのは興味深い問題である。時代の流水のなかに止められない動きがあったのだらうと考えられる。

一方、涂敏正神父は羅厝教会の信者及涂姓一族にとつて誇りの象徴であったことは間違いないと言える。

参考文献

- 1、大國督編、『台灣カトリック小史』、東京：杉田書店、一九四一年。
- 2、Fr. Pablo Fernandez O.P. 著、黃德寬訳、『天主教在台開教記——道明會士的百年耕耘』、台北：光啓出版社、一九九一年。

- 3、Pablo Fernandez (Compiled and edited) Felix B. Bautista (Translated) *One hundred years of Dominican apostolate in Formosa 1859-1958* 1958 Philippines
- 4、黃竹榻著、『簡史——台中教區天主教羅厝天主教會』、彰化：羅厝教會、一九七五年。
- 5、曾慶國編、『埔心鄉志』、彰化：彰化縣埔心鄉公所、一九九三年。

- 6、涂東波編、『新館村涂氏族譜』、彰化：編者自印、一九九六年。

- 7、施麗蘭、「涂敏正神父與里協淺次郎教區長」、『鐸聲』、三五卷一期、(三六二期)、台北：鐸聲月刊社、一九九七年。

- 8、古偉瀛、「台灣天主教史上的里協淺次郎與涂敏正」、二十世紀台灣歷史與人學術討論會、國史館、二〇〇〇年一〇月。

- 9、黃清富等編、『羅厝耶穌聖名堂開教一二五週年紀念專刊』、彰化：羅厝教會、二〇〇〇年。

注

- (1) 曾慶國主編、『埔心鄉志』、彰化：埔心鄉公所、一九九三年、六八頁。

- (2) 曾慶國主編、『埔心鄉志』、一五五頁。

- (3) 曾慶國主編、『埔心鄉志』、六八頁。

- (4) 曾慶國主編、『埔心鄉志』、六八頁。

- (5) 黃竹榻著、『簡史——台中教區天主教羅厝天主教會』、彰化：羅厝教會、一九七五年、二頁。

- (6) 黃清富等編、『羅厝耶穌聖名堂開教一二五週年紀念專刊』、彰化：羅厝教會、二〇〇〇年、五六頁。

(7) 黄清富等編、『羅厝耶穌聖名堂開教一二五週年紀念專刊』、彰化・羅厝教会、二〇〇〇年、七六～七九頁。

(8) 台湾では女性を訓練して伝道の手伝いをさせた。だが、それらの女性は結婚が許されなかった。このような女性は姑婆と呼ばれている。

(成功大学歴史学系教授)